

ガーデナー建築家として  
建築と庭と植物のすべてを理解し、  
建物の内・外を総合的に設計する勝田無一さん。  
空の下の自在空間を充実させるために  
エクステリアをどう取り込んで  
家族が楽しくくつろげる場をつくればいいか  
そのアイデアを教えていただきます。



家に庭を取り込んだインナーテラスガーデン。限られた造園スペースを立体的に確保し、庭とテラスを一体化させて広さを演出。

# 「庭は外の部屋」だから 塀で囲い、のびのびと暮らしたい

## 勝田 無一

### 日本人は建物だけでなく「エリア」で生活していた

住宅と庭を設計して35年。いつごろからか、世の中の住宅が自分の考えと違うことに気づきました。なぜだろうと思い、庭と人間の生活史を考えるにつれ、私なりの結論に行き着きました。

そのキーワードが「塀とフェンス」「庭とガーデニング」です。それぞれがどう違うかに、大きな意味が隠されています。

昔の農家を思い浮かべてください。縁側ですかを食べたり、柿を干したりできる、外と内が開放的につながった建物。

もともと日本の農家は、南向きの広い前庭があつてそこで農作業をし、縁側を通して農作物を選別したりしていました。前庭の先には農道、北には常緑の防風林、西には西日を防ぐシラガシなどの高垣があり、建物の中だけでなく「エリア」で生活していました。

で、近所の人が前の道を歩いていると、「お茶飲んでいきなよ」と声をかけ、村の情報交換をしたりする。少し前までの日本人は、こういう内と外とのあいまいな生活が普通だったのです。

### 日本の「塀」と欧米の「フェンス」の違い

それが戦後の高度成長で、農地はベッドタウンとしてどんどん開発されました。前の農道はバス道路に、農家の庭は分譲して住宅に。そして道路を近所の人でなくよそ者が歩きはじめると、プライバシーを守る必要が生じ、塀を立てるようになりました。

農村が街になることで、「塀」が発生してきたのです。

一方、欧米の住宅には、日本のような塀ではなく、あっても中の庭や建物が見通せるフェンス程度。建物は窓もドアも頑丈で建物自体で完結し、エリアでなくインナーでがっちりガードして生活しています。欧米では個人と社会が対峙しているのです。

そして、いま日本でつくられている新興住宅地の住宅は、大半がこの欧米式になっていて、塀がありません。たしかに猫の額みたいな狭い庭をブロック塀で囲っても日陰になってうつとうしいだけ。それならば塀じゃなくフェンスに、ということなのでしょう。

### 庭とガーデニング、欲しいのはどっち？

ここで、日本の庭について考えます。

たとえば京都の大徳寺は、広大な庭の一部に4畳半ぐらいの枯山水がつくられています。この枯山水部分は、いわば庭の中の部屋という感じです。龍安寺の石庭も、塀で囲われた落ち着いたたたずまいと、外の一室という雰囲気をもっています。

この時代から、日本人にとって囲われた庭というのは、完全な戸外ではなく、「外の部屋」という意味合いだったのだと思います。

塀をつくって囲い、家の中にに対して、外に部屋をもうひとつつくること。そういった「外の部屋」をつくるという感覚で、日本人は昔からずっと庭をつくってきたのです。

対して「ガーデニング」とは、囲うべき庭がなくなつて、建物の本体だけになつてしまつたところで、建物のまわりを装飾すること。道を通る人の目を楽しませるため、街をきれいにするため、自分の家の周囲を

パパイヤが実をつける楽しい対面キッチン。ガラス折り戸を開けると、キッチンは温室と一体化します。



庭の緑を楽しめる半戸外の土間。家の「中」と「外」の空気が同化し、不思議な一体感が。



デコレーションすること。そのための造園デザインを、私は「ガーデニング」と定義しています。

ですから、庭をつくりたいと思っている方は、「庭」を希望するのか、「ガーデニング」を希望するのか、そのあたりの見極めをきちんとしなければなりません。そうでないと、花も木もきれいに植わったけれど、外から見られていて居心地が悪く、庭の生活を楽しめない…といったことにもなりかねないのであります。

### 狭いからと諦めず、庭づくりを工夫して快適に

さて、狭いからということで、塀でなく見通しのいいフェンスを選択した最近の住宅は、塀で囲う「庭」を捨ててしまいました。しかし「庭付き一戸建て」は日本人の長年の夢だったはず。郷愁の「庭」を諦めてしまって、本当にいいのでしょうか。

いや諦めちゃいけない、ということで、考えたのが「インナーテラスガーデン」と、「囲いの建築」シリーズでした。中途半端なフェンスはやめて、建物の外壁自体を塀にして、その中に庭をつくることを思いつきました。要するに、家の中に庭を取り込む住宅です。

あるいは、2階までの高さのある半透明なポリカーボネートなどの塀で、敷地全体を大胆に囲ってしまう。こうすれば、光は入っても視線は入らないので、建物を思いっきり開放的にして戸外とつなげることもできるし、裸で庭に出ることだってできます。

いずれにしろ、しっかりとした「塀」をつくり、外からの視線を遮断したうえで、家と庭をつなげるのです。こうすれば、人の視線を気にし

ながら暮らすこともなくなり、家に居ながらにして、おおらかに戸外の開放感を味わうことができます。

こういったインナーテラスガーデンや屋上庭園、周囲に高い塀をめぐらせるプライベートシェルターなどの提案は、次号から具体例とともにご紹介していきたいと思います。

狭い土地だからと庭づくりを放棄するのではなく、狭い土地だからこそ庭づくりに知恵を使いたいもの。そして、ちょっと工夫することで、どんな条件の家でも快適な庭を楽しめるのです。

勝田 無一 (かつた・むいち)

建築家・造園家



1951年 静岡県出身。

1974年 東洋大学工学部建築学科卒業。

1983年 (有)創設計設立、代表。

住宅・マンション・施設店舗の設計から、造園・ガーデンデザインの設計まで、「庭と家作り」をテーマにした作品で評価を得る。08年には銅板植木鉢のオブジェ作家としても活動開始。作詩家でもあるなど幅広く活躍。著書「私の設計頬末記」創設計、「人気ガーデナーのガーデンデザイン」世界文化社、住宅雑誌等掲載多数。

# 庭を室内に取り込んで暮らす インナーテラスガーデン



勝田 無一 (かつた・むいち)

建築家・造園家

1951年 静岡県出身。

1974年 東洋大学工学部建築学科卒業。

1983年 (有)創設計設立、代表。

住宅・マンション・施設店舗の設計から、造園・ガーデンデザインの設計まで、「庭と家作り」をテーマに活動。

著書「私の設計頃未記」創設計、「人気ガーデナーのガーデンデザイン」世界文化社、住宅雑誌等掲載多数。

ガーデナー建築家・勝田無一さんが提案する「インナーテラス」は、家の中に外部空間を取り込んだ半戸外の新しい生活スペース。インナーテラスのある実例を紹介しながら、空の下の自在空間に、家族が楽しくくつろげる場をつくるにはどうしたらいいか、そのノウハウを伝授していただきます。

縁側、軒先、前庭、土間——日本の住宅になくてはならなかった外部的な生活の場。古来から日本人は「外」と浸透性のある生活をしてきました。しかし近年こういったスペースは切り捨てられ、敷地が狭い、庭がない、騒音が入る、プライバシーがないなどの住宅事情で、屋内に引きこもることを余儀なくされてしまいました。そこで私は、外部空間の生活機能を住宅の内部に取り込むことによって、外と内がゆるやかにつながった新しい生活スタイルが生まれるのでないかと考えました。

こうしてできた「インナーテラス」は、家の中にある、半戸外のアウトドアリビング。昔の民家の土間を明るくしたような、縁側や軒先の生活を家の中に再現したような空間です。

野外でバーベキューをしても、風が強いと不快だし、雨が降れば大あわてになります。しかしインナーテラスなら、雨が降っても風が強くても大丈夫。洗濯物干し、植木鉢の植え替え、日曜大工、子どもの水遊びまで、今まで外でしていた生活がリビングルームでできてしまう、便利で楽しい生活テラスなのです。

## PLAN 1

### 庭と合体した明るい民家 自然な風の流れで夏涼しく冬暖かい

H様邸

先代からの古い日本庭園ができるだけ残して建て替える…そんなご希望に沿って設計した住まいです。庭づくりや盆栽が趣味のご主人が、雨の日でも庭仕事を楽しめるように、庭をダイナミックに室内に取り込んで、土間のインナーテラスをつくりました。

テラスの上部、トップライトピット内には、温度によって開くルーバー窓を設置。煙突効果で家中の空気を吸い上げ、24時間自然に換気できる健康&快適な家もあります。

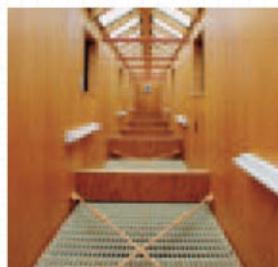


三層で風が吹き抜ける爽快なインナーテラス空間。2階のトラス梁の上はグレーチングの床板が設置され、窓掃除用のキャットウォークに。

テラスから庭を見たところ。家の中と外の空気が同化し、一体感が。並べられた植木鉢は、テラス内の土の部分に直植えするために主人が用意したもの。



インナーテラスの上の天井。斜め天井には電動開閉トップライト、中央上部にはトップライトピットがある。



トップライトピットの内部。左右の開口部は、気温が上がるとルーバーが自動的に開放。左右に風が抜けることで負圧が生じ、下から煙突のように風を吸い上げます。



## 狭い庭を広く楽しく使う 土間テラスのアウトドアリビング

T 様邸

このインナーテラスは、床にタイルを敷き、一部に土を入れて樹木や草花を植え込みました。二層吹き抜けの南側は、間口いっぱいにガラスパネルの折戸サッシを設置。サッシを閉じれば室内になり、サッシを引くと全面開口。まさに「外」になります。

リビングに直植えの植物があり、子どもが水遊びできる土間テラスがある。汚れたら水洗いできるので、犬小屋も置ける。レンガの炉も設置したので、雨や風を気にせず、アウトドア気分でバーベキューも楽しめます。



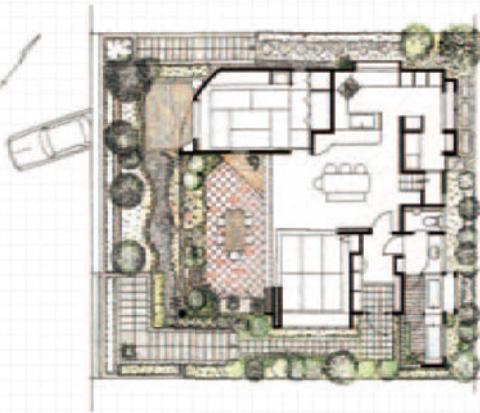
二層吹き抜けのインナーテラス。横引きガラス折戸を開放すれば、外との仕切りが消えて庭とテラスが一体化。限られた庭スペースを広く演出。



インナーテラスを上から見たところ。庭との境に土を入れ、植物を直植えしています。犬小屋や炉も設置され、まさに戸外の感覚です。



インナーテラスは水遊びOK！子どもたちは室内にいながら自由に外遊びを楽しめます。



家の中に入ることを忘れるような高い天井と開放感。2階には窓掃除用のキャットウォークが巡らされ、手すりは物干しや布団干しにも利用されるとか。



### そこが聞きたい！

Q インナーテラスに向く植物は？

A 家のためには湿気がこもらないほうがいいので、あまり水がいらない植物の方が向いています。また、外よりも日照時間が短いので、それに耐えられる植物。私は自分の家で、水をどのくらいやらなくていいか試したり、北側で花を咲かせる庭用の植物を育てたり、いろいろ実験しています。実際に植え込む場所をよく観察し、日照時間を想定し、植物を選定することがポイントです。

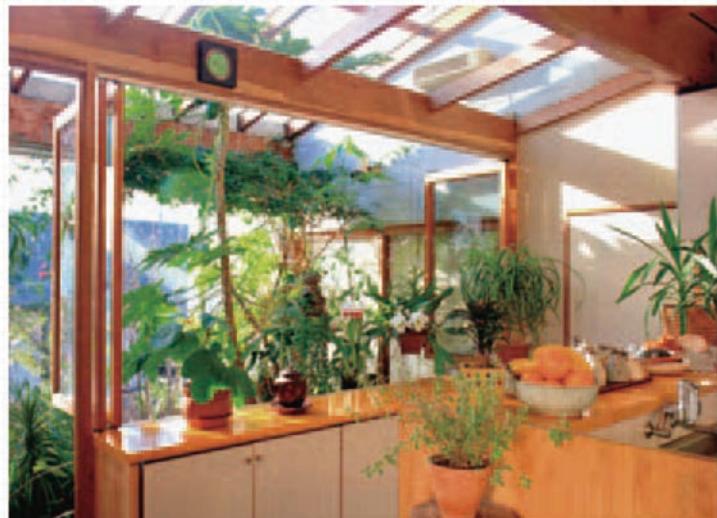

**PLAN 3**

**インナーテラスの原点 +  
坪庭ジャングル  
「植物と住める家」がスタートに**

勝田邸

そもそも庭を室内に取り込むという発想は、自分の家が原点でした。植物が大好きだった私は、植物と一緒に住める家が欲しかったのです。そこでキッチンシンクの前に坪庭の温室をプラン。光や風や緑を感じながら作業ができると、家族にも大好評です。

その隣にはインナーテラスを設置。実際に住んでみると、心地よさは想像以上でした。しかも室内と戸外の間に中間の空間があるので、窓を閉めれば空間全体が二重ドアとなり、室内の断熱性が高まったことも収穫でした。



楽しい対面キッチン。壁に向かって作業するだけでなく、ブーゲンビリアの木漏れ日を浴びて、パパイヤの実を眺めたり風を感じながら炊事ができます。



坪庭ジャングルの平面図とスケッチ（植栽5年目ごろ）

キッチンの前面につくった坪庭ジャングル。昼間はガラスの折り戸を開放して室内と一緒に化し、湿度の必要な夜は戸を閉めて加湿しています。



リビングからインナーテラス（左）と坪庭ジャングル（右奥）を見る。どちらも緑豊かな気持ちのいい空間です。



日曜大工で芝生を素焼きタイルに張り替えたインナーテラス。日曜日の朝は、朝日を浴びながらの食事が楽しいとのこと。

### そこが聞きたい！

失敗談はありますか？ Q

A 失敗と試行錯誤の繰り返しです(笑)。たとえばわが家のインナーテラス、東南の角だからいいかなと、最初は芝生を植え込んだんです。ところが日照時間が4時間以上ないとダメらしく、どうしてもテーブルが影になってしまって、そこからはげてしまう。ガラスやメッシュのテーブルでもダメ。とうとう家内に「素焼きのタイルにしてよ」と言われ、日曜大工でタイルを貼りました。ええ、全部私が(笑)。



# 砦の中に小宇宙をつくって “ビールで夕涼み”の開放感を楽しむ



勝田 無一 (かつた・むいち)

建築家・造園家

1951年 静岡県出身。

1974年 東洋大学工学部建築学科卒業。

1983年 (有)創設計設立、代表。

住宅・マンション・施設店舗の設計から、造園・ガーデンデザインの設計まで、「庭と家作り」をテーマに活動。

著書「私の設計頬未記」創設計、「人気ガーデナーのガーデンデザイン」世界文化社、住宅雑誌等掲載多数。

ガーデナー建築家・勝田無一さんが提案する「囲いの建築」は、建物の外壁を塀にしたり、敷地全体を大胆に囲って外からの視線を遮断して家と庭をつなげるという考え方。囲いの建築での快適な庭ライフを紹介しながら光の取り込み方、階上庭園のつくり方などを教えていただきます。

庭の緑や風を楽しみたくて、大きな窓のついた開放的な家を建てたのに、道路からまる見えで落ち着かず、結局窓にはいつもカーテンがかかったまま、庭で過ごすこともなく……そんな残念な住まい方をしている方は決して少なくありません。そこで私が考案したのが「囲いの建築」でした。中途半端なフェンスでなく、半透明なポリカーボネートなどで、2階までの高さのある塀をつくり、敷地全体をぐるりと囲ってしまう。あるいは建物の外壁自体を塀にして、テラスなどの外部空間ごと包み込んでしまう。とくに土地が狭くプライバシーも保ちにくい都会で快適に住まうためには、砦を築き、内と外を一体化させた小宇宙をつくる必要があるのではないか。

こうして設計した「囲いの建築」の中では、みなさん本当にリラックスして暮らしています。たとえば風呂あがりに裸で中庭テラスに出て、ビールを傾けながら夕涼みだってできます。外からの視線を遮断したうえで、家と庭をつなげれば、周囲に気をつかわずに戸外の開放感を味わうことができるのです。

## PLAN 1



付近の建物の高さを調査して囲いの壁の高さを決めたので、のぞかれる心配もなし。



リビングダイニングから庭に向けて大窓を設けた開放的な間取り。三角トップライトのバスルームからタオル一枚で夕涼みも。

## ガラスブロックで光を入れて 視線・騒音を遮る都会のリゾート K様邸

前後左右が立て込んだ住宅街。横がだめなら上に庭をつくろう、ということで、階上にルーフガーデンを設置。建物はシンプルな箱形にして、壁自体が塀の代わりになるように設計しました。壁面の一部にはガラスブロックを組み込んだので、光を入れながらも視線は遮り、壁で囲むことで騒音もかなり防いでくれます。

2階の斜め屋根の下にリビングダイニングをつくり、庭に向かって大きな窓を取ったので、隣家を気にせず窓を開け放ち、光や風を感じて暮らせます。



シンプルな外観のアーバンコートハウス。ガラスブロックの内側には、都会のリゾートが隠れています。

## 高さ4mの明るい塀で敷地を囲い 庭と室内を開放的につなぐ

T様邸

光を透過する半透明のパネルで、敷地のまわりに塀を巡らせたダイナミックなプラン。塀は2階までの高さがあるので、道路や隣家からの視線が遮られ、落ち着いてくつろげる明るい庭がつくれますし、家の窓を大きく開けて室内と庭をつなげることができます。

塀は上に抜けているので、建ぺい率も関係なく自由に設置できます。空の青さを手中にするプライベート・ガーデンは、都市型住宅の「外」を楽しく棲みこなすライフスタイルの提案です。

高さ4mのポリカーボネートの  
塀を巡らして敷地を囲ったので、  
明るさはそのままに、まわりの  
視線を気にせずにくつろげるブ  
ライベートガーデンが完成。

土間空間の一角に設けられた  
インナーガーデン。坪庭として和室から眺めるのも風情が  
あります。

室内→土間空間→庭という3段  
階の空間が、ゆるやかにつなが  
っています。どこにいても外を  
感じられる開放感が心地よい。



家の外観。明るい半透明の塀なので、高さがあっても圧迫感や閉鎖感はありません。



土間と庭は大開口で一体化。塀が外からの視線を遮っているので、これだけ開いていても落ち着けるのがうれしい。

### そこが知りたい!

**Q** 塀の素材は?  
風はどう抜けるの?

**A** 素材は、ここではポリカーボネートを使いましたが、FRPも使います。ポリカーボネートは高級感があるんですが高価なので、少しお値段の安いFRPを採用することが多いですね。また、防火規制のある地域では、プロフィリット・ガラスを使います。4mもの塀が立っていると風通しが悪そうですが、ある程度敷地が広ければ、風は自然に抜けます。狭小地の場合は、風を抜くために、パネルとパネルの間を少しづつ開けて張るといった工夫をします。




**PLAN 3**

### 開放感のあるバスタイム 立体テラスで35坪が広々空間に M様邸

狭小地でも開放的なエクステリアのある住まいはつくれます。35坪の敷地を庭ごと囲い込んだプライベートシェルターは、光と風は通しても視線はシャットアウト。リビングは日当たりのいい2階に設けたので、インナーテラスを眺めおろす立体的な景観を楽しめます。2階テラスの床には光の透ける素材を使ったので、階下は洗濯干し場にも。そして、なんといってもユニークなのがバスルーム。窓の外のテラスには水槽が置かれ、金魚を眺めながらのバスタイムを楽しめます。



2階テラスの床が光を透過するため、その下はこんなに明るい。雨に濡れないので洗濯物干し場として重宝。



2階テラスはまさにアウトドアリビング。左の折戸を開けると、室内リビングともつながって開放的なくつろぎの場に。



「金魚を眺めながら入浴したい」というご希望がかなったバスルーム。大きな窓の外にはテラスガーデンと水槽が。



1階のインナーテラスには土を入れて木や植物を植え、緑豊かなガーデンに。大きな水槽がアクセントになっています。



狭い庭も周囲を囲み、内部と開放的につなげることで、広々とした生活空間に。家の外側にもう一つ「外の部屋」をつくる感觉です。奥は2階テラス。

### そこが知りたい!

安全な害虫よけの薬を教えて!

**Q**

**A** インナーテラスガーデンには土も植物もあるので、どうしても虫が発生します。でも室内とつながっているから殺虫剤は使いたくない。そこで家庭で簡単につくれて安全性の高い、生薬の害虫よけをご紹介しましょう。

♣唐辛子を使う…両手に山盛り程度の刻み唐辛子と月桂樹を2リットルの焼酎に1週間漬ける+醸造酢+添着剤として植物油原料の粉石けん少々。濾過して霧吹きで散布。さまざまな病虫害に効果があります。

♣コーヒーを使う…飲んだ残りをスプレーするだけで、カフェインを嫌うナメクジを撃退。

## 1階中庭 + 屋上庭園 2つの庭を楽しむ都市型二世帯住宅

S様邸

上下住み分けの二世帯住宅だからといって、2階世帯の庭をあきらめることはありません。たとえばこのお宅では、親世帯は1階の中庭に面し、子世帯は2階の屋上庭園に面して、それぞれが庭を取り込んだ開放的な暮らしを楽しんでいます。なおかつ、1階の中庭は吹き抜けになっているので、上下階の空気をつなげ、お互いのほどよいコミュニケーションの場としても活躍。屋上庭園は周囲に採光折板を張りめぐらし、視線をシャットアウトした安心の都市型プライベートガーデンです。



1階の親世帯の中庭は、吹き抜けになつて2階の子世帯とつながっています。庭を通じて広がりを共有し、コミュニケーションがとれます。



2階の子世帯LDKからデッキテラスと屋上ガーデンを見る。トラス木組みの大きな屋根架構が戸外との心地よい一体感を演出。



中庭の吹き抜けをはさんで広がる2階のデッキテラスは、床に光の透けるグレーチングを採用して階下を明るくしています。手前がLDK、奥が屋上ガーデン。

### そこが知りたい!

**A** 階上庭園には軽い土が必要?**Q**

2階や屋上などで使う土は、軽いに越したことはありません。とくにこのお宅は木造なので、土の重さには神経を使いました。水の重さを蓄積しない排水性と適度な保水性をあわせ持つ土の配合が肝心。また、底部の目づまりしない排水層が大切です。使用しているのは杉の皮やヤシ殻などが入った比重0.3の有機系の土。少し黒土を混ぜたり、自動灌水装置をつけたりして保水性を高めています。写真は屋上庭園の植え込み。中木程度はじゅうぶんに植栽できます。今は苗木ですが数年後には見ごたえのある木になるでしょう。



採光パネルのスクリーンを使った囲いの建築。外から見るとシンプルな箱形の住宅です。

